

Ⅲ 森をはじめとする生物多様性の現状と課題

1 生物多様性の現状

(1) 地形・地質（地層）

本市は、都心から40～50km圏に位置し、豊かな水と緑に囲まれた地域です。奥多摩から連なる山なみ、草花丘陵や秋川丘陵などの緩やかな丘陵地、大小の河川などの変化に富んだ地形が多様で豊かな環境をつくり出しています。

市域の北西部は、秩父帯と呼ばれる主に中生代ジュラ紀の古い地層から形成されています。秩父帯は、市域の西端から養沢川流域、秋川流域を経て、武蔵五日市駅近くまでの広範囲に及んでおり、本市の最高標高である芥場（あくば）峠付近（1,067m）も含まれています。

市域の南西部は、四万十帯の小仏層群で、中生代白亜紀の終わり頃の地層であり、秋川の支流である盆堀川の流域全体に及んでいます。

これらの中生代の地層はとても緻密（ちみつ）で硬いため、川はあまり河原を広げられず、山の谷を下へ下へと侵食します。その結果、これらの地域の山（関東山地）は、とても急しゅんな地形となっています。

一方、市域の北東部、南東部は、丘陵地となっており、北東部に草花丘陵、南東部に秋川丘陵があります。これらの丘陵地は、数百万年前の新生代新第三紀後半の鮮新世の末期に堆積した地層で構成されているため、まだ軟らかく、崩れたり、侵食されたりしやすいため、関東山地と比べると比較的なだらかで、たくさんの谷がみられます。

また、市域の西側中央部の地層は、五日市町層群と呼ばれ、数千万年前から数百万年前の新第三紀に、海洋底に堆積した地層（海成層）であり、この地層が元になってできたのが五日市盆地です。

秩父帯の関東山地を流れる秋川は、谷の迫る滝や溪流に始まり、五日市盆地に入ると河原が広がり、せせらぎやバーベキューでにぎわう場所となります。このような本市の山地や丘陵地の地形・地質（地層）は、四季折々の美しい景観を形づくる花木などを育てており、秋川渓谷の大きな魅力を創出しています。

さらに、市域の東側中央部は、段丘・立川面と呼ばれ、本市の語源の一つともなった秋留台地となります。ここは、新第三紀にできた地層が、258万年前から数万年前の新生代第四紀前半の更新世に、多摩川の支流である秋川と平井川に削られてつくられたものです。

市域の中央部から東部にかけての河川沿いの地層は、1万年前から現在に至る第四紀後半の完新世に堆積したものであり、現在の河川によってつくられた本市では一番新しい河川の沖積低地です。

このような山地から低地までのバリエーションに富んだ地形・地質（地層）は、地域ごとの美しい景観を形づくるだけでなく、本市の生物多様性を支える「大地の遺産」となっています。このように多様な地形などをもつ地域は、東京都内でも珍しいものであり、これを保全・保護し、地域の活性化につなげていく取組が「秋川流域ジオパーク構想」（以下「ジオパーク構想」という。）となります。

（２） 植生・植物

本市の植生現況を表す植生図（あきる野戦略に掲載）は、平成19年に東京都が作成した植生図をベースに、本市の自然環境調査の結果を反映したものです。これによると、森林は市域の西部、旧五日市町域を中心に広がり、戦後の拡大造林により植林されたスギ・ヒノキが最も広い面積となっています。

本市には、人の手に依存しない原生林と呼べるような森林は残っていませんが、標高がおよそ600m以上の養沢川上流域などには、比較的自然性の高い植物が残っています。

また、丘陵地では、二次林が広く残っており、多摩地域の自然植生である常緑樹林への遷移過程がみられる地域もあります。

かつてはスギ・ヒノキ林、雑木林として、人の暮らしと密接に関係してきた森の様相が徐々に変化してきています。こうしたことに伴い、定期的な管理に適応してきた動物や植物については、その姿を消してしまうことが懸念されています。本市に分布する特徴的な植物には次のものがあげられます。

＜山地に分布する植物＞

ブナ、ヒトツバカエデ、ツクバネソウ、キヌタソウ、オクモミジハグマなど

＜岩角地に生育する植物＞

オノオレカンバ、アブラツツジ、ホツツジ、イワギボウシ、イワナンテンなど

＜溪流沿いに生育する植物＞

カツラ、オニイタヤ、ギンバイソウ、ハシリドコロ、カメバヒキオコシ、ヒメレンゲ、ナルコスゲなど

＜丘陵地に分布する植物＞

ツガ、モミ、ケヤキ、ヤマザクラ、エノキ、ハンノキ、クサボタン、カタクリ、オケラなど

＜草地に生育する植物＞

マルバハギ、リンドウ、オカトラノオ、オヤマボクチ、トネアザミ、リュウノウギク、シシウドなど

(3) 動物

これまで示したとおり、本市には、様々な地形・地質（地層）を基盤に多様な植生が成立し、東京都内にありながら多くの動物が生息できる環境があります。「あきる野市自然環境調査報告書」によると、本市で確認された動物は、特定外来生物や外来種を除くと、哺乳類が23種、鳥類が101種、爬虫類（ヘビ類）が8種、両生類が14種、昆虫類が129種、魚類が17種となっています。

全国的にも個体数が少なく、希少な猛禽類であるクマタカをはじめ、ツキノワグマやカモシカなどの大型の哺乳類からヤマトセンブリやオオムラサキなどの昆虫類まで、希少な動物や昆虫がそれぞれの場所でバランスよく生息しています。

このバランスを維持し、減少している生きものの生息地の保護と個体数の回復を図るためには、豊かな森づくりなどの自然環境の向上が必要となります。また、絶滅危惧種や希少種の存在は、本市の豊かな生物多様性を示す恵みの森の宝ともいえるべき存在であることから、生息場所となる自然環境を保全・回復するための取組や対策が重要となります。

一方、森林生態系被害や農業被害などの原因の一つであるニホンジカやイノシシ、ニホンザルなどは、生息域の拡大や生息頭数の増加が確認されているため、人と野生動物の共存に向け、更なる対策が必要な状況となっています。

また、アライグマなどの外来種も生息域を拡大してきており、農業被害の拡大や在来種への影響などが懸念されているため、継続的な対策が必要な状況となっています。



写真2 クマタカ



写真3 アライグマ

2 生物多様性の課題

(1) 生息・生育場所の維持・回復

これまで示したとおり、本市には、様々な自然環境のもと、豊かな生物多様性を示す証が至るところにあります。

生きものには、それぞれの種に応じて生息・生育に適した環境があります。動物を例にすると、一定の水辺環境であったり、広い面積の樹林であったり、餌となる小動物が多数生息していることであったりと、適した環境は様々ですが、上手に棲み分けることで多様な動物が生き続けています。

しかし、近年では、土地利用の変化や自然の質の低下などによって、こうしたバランスが乱れ、生息・生育場所の喪失や分断、さらに在来種が築き上げてきた生態系への影響が懸念されています。

このため、地域連携保全活動を通じて、生きものの生息・生育に必要な自然環境の維持・回復が必要となります。

(2) 有害鳥獣・外来種対策

近年各地で問題となっているニホンジカによる森林生態系被害、イノシシやニホンザルによる農業被害などは、本市においても例外ではなく、増加傾向となっています。原因としては、生息域の拡大や生息頭数の増加などがあげられます。

また、特定外来生物であるアライグマ、ガビチョウ、外来種であるハクビシンなども生息域の拡大や生息頭数の増加が確認されています。特に、東京都でも対策が進められているアライグマは、急速に個体数が増加していると考えられ、現在は、市内全域にその勢力を広げています。

アライグマやハクビシンは、農作物に被害を与えているとともに、地域によっては、魚類や両生類を捕食してしまうなど、在来の希少種にも悪影響を及ぼしています。特に、トウキョウサンショウウオなどの小動物をよく捕食することが確認されています。

このように、自然のバランスに大きな影響を及ぼす可能性がある生きものについては、実態の調査や防除などの取組を継続していくことが重要となります。